

## 中国語教授法の変遷\*

俞 稔 生\*\*

The Historical Changes Regarding  
the Methods of Teaching Chinese

Rensheng Yu

### キーワード:

発音、ピンイン、文法、教科書、教授法

### 概要:

新旧の中国語教科書と教授法を比較形式で説明し、自分なりの見解を示した。発音では、従来の指導方法を踏襲しながらも、個々の教師が持っているアイデアを学習者に紹介すべきだと考える。年齢が40代を越えた教師は古い発音や文法が知らない間に染みついているので、日々の研鑽により、これらの影響を最小限に食い止めなければならない。ピンインは発音表記以外にも、文法の認識をはぐくむ重要な要素なので、これまで以上に神経質な取り組みが必要だ。使用する教科書が決まったら柔軟に対応し、学習者の中級段階(生涯教育)を見据えながら、何を、どこまで、どう教えるのかを熟慮した効果的な教授が求められる。

### はじめに

中国語の教科書選びでは、ずいぶん頭を悩ませられる。それならばと、2005年春、自前の教科書「中国語クリニック」なるものを出版することにした。手をかざせば、中国語の悪い箇所がピタリと治る、まるでカルト的な目標をかかげて編纂したにもかかわらず、果たして思い通りの効果が出るのか心細いかぎりだ。執筆にあたり、ここ10数年間にわたる研究と教育を振り返り、注意すべき点を再確認したのが小論である。

教科書と教授法は一体となってこそ高い効果を生み出す。たとえば、小論の**無気音と有気音**の項目書かれてある内容は自分が教えている中で発見し、会得したもので、多くの教師にとって、これまでの発想では理解しにくいかもしれない。これから、通り一遍の教え方にならないよう、教授法にはいろんな工夫を凝らしていきたい。

### 1. 発音の教授法

#### 1-1. 声調

図1の声調グラフは凡そ中国語の教師をしている者がすべて学生時代に単母音を練習したときの定番である。この五十七年も前に趙元任が表した声調グラフ(1)は今でも中国語の教科書において大いに幅を利かせている。しかし、日本では第三声のカーブの不安定さ、複雑さを指摘する声も多く、近年では図2のように単純化した概念図で表そうとする傾向が増加している。声調は本来シンプルなもので、音の高低の区別だけで対応できるという発想だ。図3は図2の各声調を個別に展開したもので、半三声が出現する確率が第三声のそれより高いことから、従来の半三声を三声とし、第三声を「三声強調型」と表現している。線の細さ、太さにも気を配ったものもあり、なかなかの力作だが、本家本元の中国の権威筋は「三声強調型」という表現を認めることはないであろう。

図1

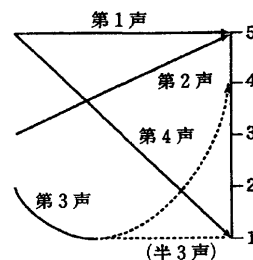


図2

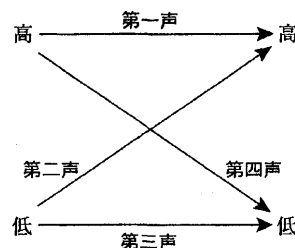
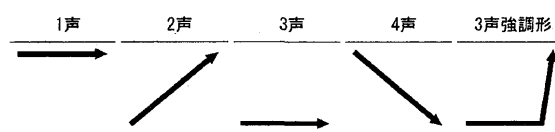


図3



\* Received December 22, 2004

\*\* 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 福祉コミュニティ学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

また、中国語の音声は2音節が基本単位であることから、単音節のグラフから声調を練習させることへの疑問を抱く教師も少なくなかった。そこで、単音節の発音練習を極力少なくして、20パターンある「声調の組み合わせ」練習を配置し、声調を把握させようとするテキストが普及してきた。その単語には、挨拶用語、地名、食べ物など入門期の学習者に馴染みやすいものが選択されている。

中国発行の外国人向け教科書には、発音の段階

から必ずと言っていいほど漢詩が掲載されている。これは漢詩の内容を味合わせるといっても、多音節の練習を通して声調を把握させようとする意図が明確である。日本でも、2音節より多音節の練習を取り入れたほうが、中国語のリズムを把握しやすいという研究結果がずいぶん前から出ている。導入の工夫が適切に配慮されれば、多音節の練習も効果的であると考えるが、入門期の発音練習をどこまでとするかは著者それぞれの判断であろう。

「声調の組み合わせ」の一例

	第一声	第二声	第三声	第四声	轻声
第一声	fēijī 飞机	Zhōngguó 中国	qiānbǐ 铅笔	shāngdiàn 商店	shūfu 舒服
第二声	xióngmāo 熊猫	tóngxué 同学	yóuyóu 游泳	xuéxiào 学校	péngyou 朋友
第三声	lǎoshī 老师	hěnnán 很难	nǐhǎo 你好	nǔlì 努力	nǐmen 你们
第四声	miànbāo 面包	wàiguó 外国	Rìběn 日本	zàijiàn 再见	piàoliang 漂亮

### 1-2. 無気音と有気音

中国語の発音は濁音、半濁音ではなく、息を出すか出さないかで決定される。これに関して、何ら異議を唱えるものではない。しかし、それがゆえに、日本では‘bo’も‘po’も同じ‘ボ’で発音するよう一貫して教えられてきた。すると、例えば、「爸爸(hàba)」の発音を息をこらして発音しても‘パパ’にしかならない学習者は意外と多いのである。

学生時代の恩師で、北九州大学名誉教授であられる王徳新先生は北京の発音を「‘ベ’キン」と聞こえるように発音されていた。先の学習者に‘bo’は‘ボ’、‘po’は‘ポ’と発音するように指導してみると成功することが多い。もちろん、「喉を充分に使う」要領を習得させ、濁音化を防ぐことが前提になるが。

俞は05年出版予定の教科書にあえて「‘bo’は‘ボ’、‘po’は‘ポ’と発音する」と書いたが、早速一回目の校正の段階で出版社からクレームがついてしまった。「そんなことを書いたら、この世界では大手を振って歩けなくなってしまうよ。」とのことで、残念ながら発音の要領の一例にとどめることになった。今でも心中は「それでも地球は回っている」である。

### 1-3. そり舌音

そり舌音については小論では持論を展開するつもりはない。21個の子音を、発音部位により、6種類に分けた表に注目していきたい。

表1は従来からの定番であり、表2は比較的新しいタイプの、まだごく少数派によるものである。その違いは下列2行の入れ替えにすぎないのであるが、そり舌音を指導する上では大きな差が出てくる。

表1では学習者は3種類の(i)として学ぶが、表2では2種類(少なくとも舌歯音とそり舌音は仲間の関係)の(i)として学ぶことになる。表1で習うと、zhi chi shiの音がji qi xiの音をそり舌にしたような発音になりやすく、両者の違いは不明確になることが多い。

表2で習えば、zi ci siの延長線上にzhi chi shiがあると認識でき、ji qi xiの音との違いがより明確になるわけで、あとは舌をそらした状態のまま、zi ci siの音を発音する練習を積み重ねていけばよい。学習する順番を変えという、ちょっとした提起の仕方により、結果が随分違ってくるのである。

表1

	無気音	有気音	鼻 音	摩擦音	側面音
唇 音	b (o)	p (o)	m (o)	f (o)	
舌尖音	d (e)	t (e)	n (e)		l (e)
舌根音	g (e)	k (e)		h (e)	
舌面音	j (i)	q (i)		x (i)	
そり舌音	zh (i)	ch (i)		sh (i)	r (i)
舌歯音	z (i)	c (i)		s (i)	

表2

	無気音	有気音	鼻 音	摩擦音	側面音
唇 音	b (o)	p (o)	m (o)	f (o)	
舌尖音	d (e)	t (e)	n (e)		l (e)
舌根音	g (e)	k (e)		h (e)	
舌面音	j (i)	q (i)		x (i)	
舌歯音	z (i)	c (i)		s (i)	
そり舌音	zh (i)	ch (i)		sh (i)	r (i)

## 2. 学習時期による字音の影響

中国語には、中華民国時代の「国語」と、中華人民共和国成立後の「普通語」との二つの流れがある。日本の中国語教育界では主に後者によるが、前者の影響がある程度残っている。「いつ、どこで、どのような教師によって」学習したかを一応自らその違いを明らかにしておく必要がある。(2)

### 2-1. 異読から統読へ

中国では1985年12月に《普通語異読語審査修訂版》が公布され、方言音や文言音を残す措置を取りながらも、一文字を一音に統一、つまり異読から統読という規範を確立した。日本で「普通語」を学習・研究する上でその根拠となる《現代漢語詞典》もこれを基準に編纂されてきた。

さて、ここで問題になるのは、現在40歳を越える第一線で働く教師たちの発音である。彼らは古

い字音も知っており、誤った発音を教授したり、誤解を招くシグナルを送ったりする危険性がなきにしもあらずなのである。

“往”は“往来”など動詞の場合は第三声、“往南走”など前置詞の場合は第四声で区別していたが、85年以降は第三声だけを正音とした。「私が勉強した頃は～だった。」と、つい余計なことを言ってしまうのだろうか。“跡”、“績”、“指”など28字が対象となった。“主意”、“骨頭”、“法子”などは旧音で発音した方が落ち着く教師は少なくあるまい。しかし、現役の中国語の教師である以上、新しい資料が出たら目を通し、改める点は改めるという姿勢をしっかりと堅持しなければならない。ついでに、「教科書には“一会儿”の発音を(yíhuìr)としているが、実際には(yìhuìr)と発音する人が圧倒的に多い。」と長年にわたり解説してきたが、今の留学生の発音は(yìhuìr)がほとんどだったという経験談を紹介しておく。

### 2-2. 轻声語

轻声語はとくに北京語に多く、他の地域の中国語には少ない。例えば、広東語には全くない。日本では伝統的に北京語を標準とする傾向が強かったため、「普通語」よりも轻声語が多くなってしまった現象が存在した。

現代中国語の「普通語」では轻声語が確実に減少しつつある中、教える教師は非轻声語を轻声語で発音し、学ぶ側に混乱を招く結果も多かったに違いない。近年では、教科書や辞典などは《現代漢語詞典》に依拠して編纂されており、絶対轻声語以外は非轻声にするか、あるいは轻声と非轻声の両方を認める傾向になっている。しかし、具体的に“生日”、“消遣”などの単語をどういふ

### 《現代漢語詞典》(第二版と第三版) 10年間での轻声語の扱いの変化

- ・ 旧版では轻声であったものが非轻声になったもの  
“近视”(jìnshì), “面食”(miànshí), “管教”(guǎnjiào)
- ・ 轻声と非轻声の両方を認めたもの  
“聪明”(cōngmíng), “反正”(fǎnzhèng), “本钱”(běnqián)
- ・ 轻声と非轻声の両方だったものが非轻声になったもの  
“程度”(chéngdù), “柔和”(róuhé), “傻气”(shǎqì)
- \* 非轻声、もしくは両方を認めたものが轻声になったもの  
(このような逆行の例はごくわずかしかない)  
“亲戚”(qīnqi), “跳蚤”(tiàozao)

うに発音するかは依然として教師の影響が強いようである。

### 3. 方言

中国語の教科書ではずっと「曜日」のことを“星期”、「話す」は“说”という語が使用されてきた。“礼拜”や“讲”は南方的な言葉、あるいは俗な言葉としてほとんど日の目を見ていない。しかし、“礼拜”や“讲”は北方の中国人でもよく話すし、放送などでも日常よく耳にする単語なのだから、やはり始めの頃から覚えさせておいたほうがよいと考えている。05年に出版する予定の教科書にも、意識的にこの二つの単語は取り入れた。

“不晓得”や“干吗”は一年以上習ってから紹介してみてもおもしろい。

ところで、広東省で、ある日本人観光客らが、ホテルを借り切り、「売春婦」を呼んだという騒ぎは記憶に新しい。“小姐”という言葉が復権して20年になるが、ここ数年新たな意味合いが加わってきようで、教科書での採用は見送ることにした。

### 4. ピンインの表記

入門・初級の教科書には漢字の上や下、あるいは横にピンインがふってあり、中国語を発音する手助けとなっているのは承知の通り。そればかりか、実はピンインが語句の意味単位ごとに分かち書きにされており、文法の認識をはぐくむ上で重要な要素ともなっているのである。

しかし、ピンインの表記が苦手な著者も多いようで、出版社が相当助けてくれるのにも関わらず、未だに間違いが後を絶たない。

また、1996年に《漢語ピンイン表記基本規則》が公布され、人名、外来語、成語など多くの問題を解決したばかりか、「一つの単語の各音節は続けて書き、単語と単語は分けて書く」という方向性が明確化されたにも関わらず、従来の表記法から抜け出せないものや、著者の判断により基本規則とは異なるものもあり、あいまいな部分が多く存在しているのも事実である。下記にいくつか例を挙げて、解説する。

今天五月三十一号，星期四，是我的生日。

(1) Jīntānwūyuēsānshiyīhào, xīngqīsì, shìwōdeshēngri.

(2) Jīntiān wū yuè sānshiyī hào, xīngqī sì, shì wō de shēngri.

(3) Jìntiān wūyuè sānshiyīhào, xīngqīsì, shì wō de shēngri.

(1) はまったくひどすぎるが、はたして(2)なのか(3)なのかは迷いが生じてくる。ここでの年月日を量詞と見なせば、(2)であり、名詞と見なせば(3)である。表す意味が固定した「総体概念」は続けて書くと規定されているので、「5月31日木曜日」は(3)が優勢となる。しかし、何曜日という“星期几”は、名詞+代詞であるから、“xīngqī jī”と分けて書く…自分は納得したつもりでも、学生に説明するには何とも苦しい。

同じように、ジャスミンティー“茉莉花茶”は表す意味が固定した「総体概念」だから“mòlì huāchá”と続けて書くが、サラリーマン“公司职员”は名詞+名詞であるから、“gōngsī zhí yuán”と分けて書く…サラリーマンとは固定した「総体概念」ではないのか？全く理解しにくい。“公司”と“职员”との間に“的”という成分が入り込めるが、“茉莉花茶”にはそれができないからと説明したほうがまだ納得しやすいのではないか。

本家の中国でも例えば、全国ネットのテレビニュースの字幕“新闻联播”が“XIN WEN LIAN BO”とすべて大文字だったり、「おそれいます」の意味である“不敢当”が“bùgāndāng”か“bù gāndāng”か辞典によってまちまちという現象が見られる。テレビの字幕は舞台芸術の範疇だからとやかく言えないが、後者の方は解決できるはずだ。権威的な《現代漢語詞典》は“bù gāndāng”となっているが、表す意味が固定した「総体概念」は続けて書くと規定されているので、“bùgāndāng”のほうに統一してもらいたい。

この章の最後にあたり、学習者にピンインの分かち書きと朗読する際のポーズは違うことを認識させる必要があることを付け加えておく。

### 5. レイアウト

中国語の教科書も随分派手になったきた。その分、内容は乏しくなり、文法の要点だけを提示した、ボリュームのないものになってしまった感はある。

ある程度の分量をこなさないことには…との思いから、一般的な本より幾分多めの内容の教科書を書いたら、出版社から「こんな多くの文字があ

るテキストでは、今の学生には売れません。」とのことで、2割ほどの削減を強いられることになってしまった。増やすのもつらいが、一遍書き上げたものを減らすのは、新出単語の移動から全体の流れまで手を加えなければならず、非常につらいものだった。

さて、教師が教えるには、単語→文法→本文→練習問題という順番が一番よいと常々思っている。だが、近年の教科書にはこの配置が非常に少ないことに気づく。これにも出版社の意向がからんでいるらしい。最初に単語をもってくると、順番が単に古くさいというだけでなく、レイアウト的に融通がきかなくなるためなのだ。最初に紙面のデザインをしてしまい、その後文字を流し込むためになどと技術的なことを言われるようになるほどと思ったり、良い本を作るためには出版社の協力は欠かせないことも明らかなわけで、著者の意見はなんとなく丸め込まれてしまい、本文→{文法⇄単語}→練習問題のものが多くなっている。

配置はともかく、教師としてその教科書に合った効果的に教えられる順番を臨機応変に考えることが大切だ。

## 6. 何を、どこまで、どう教えるのか

### 6-1. 文法と暗記の関係

以前の教科書では初級段階で必要な文法項目はほとんど網羅してあった。近年、高校生をターゲットにしたものや、会話中心のものでは文法項目を絞って編纂した教科書を多く目にするようになってきた。個人的には、初級段階で一通りの文法を教授しておいたほうがよいと思っている。なぜなら、文法が分かると、会話のパターンが広がるからだ。問題は、文法だけをことさら教えるだけで、習った文法を会話表現に応用しないことにあり、これでは学生が「文法嫌い」になるのも当然の話だ。教え方では、学会で発表するような、自己満足的で、受講しても何がなんだかかわからないものではなく、ノドのつかえがストンと落ちるような説明を心がけたい。文法の理解ができた上で、短い文章を正しい発音で朗読させ、暗記させる。中国の学生は外国語を非常に早くマスターするが、日本人と違う勉強法は暗記である。暗記は応用力をも高める。

### 6-2. 初級と中級の境界線

中級の教科書は以前より豊富になってはきた。しかし、同一著者による初級と中級のシリーズも

のはまだ少ない。あったとしても、初級は一般的な内容で、中級になると急に故事成語物語などになってしまっている。中級段階の教科書の本文には、中国の今を紹介しながら、背景にある文化や思考形態に触れる内容が求められる。

文法は初級との関連性を大切にしながら、可能補語の3つのタイプ、補語の派生義、使役動詞を用いない使役表現など複雑なものを分かりやすくまとめたもの、そして何よりも類義語の比較や語句の用法を中心に編纂していただきたい。教師と言葉の件で話しあえる学生を育成し、学生の更なる発展を期待したい。

## おわりに

“小康”の和訳は時代の推移によって、「まずまずの生活」から「ゆとりのある生活」に変化した。中日辞典では“鶏素焼”「焼き鳥」のことをいまだに「すき焼き」としている。「知天」という年齢に達し、教師としていろんな面で自らの「老化」が気になりだした。お腹が出てきたら、運動しなければへこまない。「焼き鳥」が「すき焼き」にならないよう、これからも中国語の研究に更に磨きをかけなければならない。

また、高校生の雰囲気はひと昔前とずいぶん変わってしまった。それが大学生になる。「老化」を「円熟」の境地に変えていき、教授法以前の問題として、学習する意欲をかきたてる極意のようなものを身につけ、授業を活性化させる新たな課題にも取り組んでいきたい。

## 注

- (1) 平井勝利『中国語』「音声の重要性」内山書店2003. 12
- (2) 香坂順一『天線』「学習環境による中国語の諸問題」国際交流事業 団1993. 4

## 参考文献

- (1) 日本中国語検定協会『中国語の環』中国語の環編集室2001. 7
- (2) 劉方『日本漢語教材中の注音問題』長崎大学環境科学部1999
- (3) 武信彰『中国語』「中国語入門講座」内山書店1998～1999
- (4) 『漢語水平語彙与等級大綱』北京語言学院出版社1992
- (5) 『中日辞典』商務印書館・小学館2003. 1
- (6) 『現代漢語詞典』商務印書館1996
- (7) 『whyに答える中国語文法書』同学社1996. 12